

Lafcadio Hearn (小泉八雲) の 英文学作品における仏敎語について

李 子 捷

はじめに

本論の目的は、Lafcadio Hearn (小泉八雲) が執筆した英語の文学作品を通して、彼の仏敎思想に対する理解および仏敎語の英訳のし方の一端を抽出して分析することにある。

よく知られているように、Hearn はイギリス人の父とギリシア人の母との間に生まれたが、六歳以降、両親と一度も会ったことがない。若い頃、ロンドンでの貧困生活を経てアメリカに移住し、ジャーナリストとして活躍した。四十歳で来日しており、後に日本に帰化し、小泉八雲と称した。¹

これまでは十分に注目されていなかったかもしれないが、Hearn は日本に来て初めて仏敎思想に関心を払うようになった。彼の文学作品には、仏敎に関するところが少なくない。専ら仏敎語と仏敎思想を主題として執筆された著作もある。二十世紀初期の在日西洋人として、Hearn がどのように仏敎を理解して英訳したのか、ということは更なる研究を要すると言えよう。このため、本論において、筆者は仏敎学、特に仏敎思想研究の立場から、Hearn の文学作品に見える仏敎語の英訳と仏敎思想に対する理解について検討したい。

近代西洋では Charles Eliot の *Japanese Buddhism* (1935 年) を初めとして、日本仏敎に関する書籍が次々と出版されている。その中において、Hearn の仏

¹ 小泉八雲 (Lafcadio Hearn) の経歴と著作などに関しては、Elizabeth Bisland, *The Life and Letters of Lafcadio Hearn*, Boston and New York: 1906 や Oscar Lewis, *Hearn and His Biographers*, San Francisco: 1930 ほか参照。

(30) Lafcadio Hearn (小泉八雲) の英文学作品における仏教語について (李)

教に関するエッセイなどの文学作品は無視できない存在である。周知のように、Hearn は仏教学者ではない。より踏み込んで言えば、Hearn は研究者でもないため、彼が仏教を視野に入れた目的は、日本文化と日本社会をより深く理解しようとすることにあった。これは Hearn の作品における仏教の位置づけを考えるうえで重要であろう。

Hearn は日本の伝統歌謡における仏教語引用をめぐる、*Buddhist Allusions in Japanese Folk-Song* という著作を執筆した。その中において、以下のように述べている。

I remember that when I first attempted, years ago, to learn the outline of Buddhist philosophy, one fact which particularly impressed me was the vastness of the Buddhist concepts of the universe. Buddhism, as I read it, had not offered itself to humanity as a saving creed for one inhabited world, but as the religion of 'innumerable hundreds of thousands of myriads of kotis of worlds'.²

(私が数年前に初めて仏教哲学を理解しようとした際、特に印象深かったのは仏教の宇宙観の広大さであった、と記憶している。私が読み取った限り、仏教は人間たちに対して、人間が住んでいるこの一つの世界に救済の信条を与えたのではなく、数えきれない無数の諸世界で信仰される宗教を呈示したのである。)

明らかなように、Hearn は、仏教の思想と哲学を理解する際、その広大な宇宙観に刺激された。仏教が数えきれない諸世界を呈示していた点は、西洋出身の Hearn にとって印象深かったのである。言うまでもなく、Hearn は主に仏典の英訳を通してこうした仏教哲学を理解しようとしていた。このため、Hearn の仏教語英訳とその解釈は彼の仏教理解を明らかにするための不可欠な基礎となる。

Hearn は仏教について論じているにもかかわらず、日本仏教とインド・中国

² Lafcadio Hearn, *Gleanings in Buddha Fields: Studies of Hand and Soul in the Far East*, Boston and New York: Houghton Mifflin and Company, 1897, pp.208-209.

仏教との比較や相違点などにほとんど気づいておらず、日本仏教の枠組みの中においても、Hearn は各宗派の特徴などを詳細に検討していない。その代わりに、彼は仏教を日本文化の一環として観察していると言えよう。この点から見れば、Hearn のこうした視点は当時の日本にとどまらず、西洋における日本研究にとっても斬新的である。³

本論において、筆者は仏教学の立場から、主に Hearn の七種類の文学著作を中心として、彼の仏教理解と解釈を検討したい。

一、*Buddhist Allusions in Japanese Folk-Song*

Hearn は *Buddhist Allusions in Japanese Folk-Song* において、次のように述べている。

Love, it is often said, has nothing to do with reason.

The cause of ours must be some En in a previous birth.

'En' is a Buddhist word signifying affinity, -- relation of cause and effect from life to life.⁴

(恋は、よく言われるように、理性とは全く関係がない。

私たちの恋の原因は前世における何かしらの「縁」に違いない。

「縁」は親和性を示す仏教語であり、この世から来世への因果関係を意味する。)

Hearn はこの世と来世とを結ぶ「縁」について指摘している。注意すべきは、Hearn はここで「縁」を意識せず、En という音写を採用していることである。

また、縁と業との関連性について、Hearn は以下のように言っている。

³ この点については、Kato Kazumitsu edited, *Japan's Religions: Shinto and Buddhism*, by Lafcadio Hearn (New York: University Books INC., 1966, pp. 12-14) を参照されたい。

⁴ Lafcadio Hearn, *Gleanings in Buddha Fields: Studies of Hand and Soul in the Far East*, Boston and New York: Houghton Mifflin and Company, 1897, p.190.

(32) Lafcadio Hearn (小泉八雲) の英文学作品における仏教語について (李)

Is this the turning of En? – am I caught in the wheel of Karma?

The Buddhist word Rinye, or Rinten, has the meaning of ‘turning the wheel,’ — another expression for passing from birth to birth. The Wheel here is the great Circle of Illusion, -- the whirl of Karma.⁵

(これは縁の回転なのか。私は業の輪 [因果の小車] に巻き込まれたのか。仏教語である輪廻または輪転は、輪の回転を意味し、別な表現で言えば誕生から誕生への移りゆき、この世から来世への移転を意味する。ここで言われる輪は虚妄の大きな回転、つまり、業のぐるぐる回りなのである。)

Hearn は、業をサンスクリット語の表記で karma と記している。一方、縁を相変わらず日本語の音読みで記している。そして、輪廻を通して、縁と業とのつながりを強調している。

輪廻と業から離れた仏について、Hearn は以下のように示している。

Hotoke means a dead person as well as a Buddha.⁶

(「ほとけ」はブッダを意味するのと同様に、死んだ人も意味する。)

Hearn はここで日本文化における「ほとけ」の二つの意味に注意している。こうした解釈は今日の仏教学の理解から見ればやや違和感があるかもしれないが、十九世紀末期の西洋人の目から見れば、涅槃に入った仏と死亡した人の関係は微妙だっただろう。

二、*Nirvana*

Nirvana は Hearn の著作において、比較的分量の多い作品と言えよう。Hearn

⁵ Lafcadio Hearn, *Gleanings in Buddha Fields: Studies of Hand and Soul in the Far East*, Boston and New York: Houghton Mifflin and Company, 1897, pp.194-195.

⁶ Lafcadio Hearn, *Gleanings in Buddha Fields: Studies of Hand and Soul in the Far East*, Boston and New York: Houghton Mifflin and Company, 1897, p.202.

はこの作品では自分の理解をもって仏教思想をめぐって集中的に論述している。本論の検討にとっては重要な研究対象である。⁷

Hearn は *Nirvana* では、無我について次のように言っている。

Nevertheless, if we declare that Nirvana means the extinction of individual sensation, emotion, thought, -- the final disintegration of conscious personality, -- the annihilation of everything that can be included under the term 'I', -- then we rightly express one side of the Buddhist teaching.⁸

(とはいえ、もし我々が涅槃は個人の感覚・感情・思想・意識などの絶滅を意味すると断言すれば—これは意識を持った個人の最終的な否定であり、それは「私」という語のもとに含まれる一切の否定を意味する—、これで我々は仏教の教えの一側面を正しく表現したことになる。)

つまり、Hearn は自我意識の否定を仏教思想の重要な特徴の一つと見なしているのである。彼はここでは『「私』という言葉のもとに含まれるすべてのことの絶滅 (the extinction of everything under the term 'I')』とっており、「無我」を直接翻訳していない。

そして、Hearn は真実性と魂について、下記のように説明している。

There is one Reality; but there is no permanent individual, no constant personality. …… Wrapped in the envelope of what we call soul (which in truth is only a thickly woven veil of illusion), is the eternal and divine, the Absolute Reality: not a soul, not a personality, but the All-Self without selfishness, -- the Muga no Taiga, -- the Buddha enwombed in Karma. Within every phantom-self dwells this divine:

⁷ 近年、Hearn の *Nirvana* の和訳の注記研究には、前田専学・佐々木一憲 [訳] 「ラフカディオ・ハーン (小泉八雲) 著『涅槃』 -- 邦訳と註記」(1~5、『東方』24-29、2008-2013年)がある。

⁸ Lafcadio Hearn, *Gleanings in Buddha Fields: Studies of Hand and Soul in the Far East*, Boston and New York: Houghton Mifflin and Company, 1897, p.212.

(34) Lafcadio Hearn (小泉八雲) の英文学作品における仏教語について (李)

yet the innumerable are but one.⁹

一個の実在があるだけだ。しかし、永遠に存在する個人などまったく存在せず、不変の人間などまったく存在しない。……いわゆる魂（真実から見ればこれも単に厚く編まれた幻想のベールに過ぎない）の中に包まれて、永遠に存在し、神性を持っている究極の真実がある。これは魂ではなく、人格でもない。ただ利己性のない全我、つまり「無我の大我」であって、業の中に包まれている仏陀である。すべての虚妄な自我はこの神性の中にある。数えきれないほどあるが、それらは実はただ一つである。）

Hearn の解釈によれば、魂は究極の存在ではなく、個体は永遠の存在でもない。その代わりに、究極の存在は完全なる真実性 (Absolute Reality) である。また、この真実性は永久 (eternal) であって神性 (divine) を持っている。これは甚だ興味深いところであろう。Hearn は真如や法性などの仏教語に言及せず、神性 (divine) を持っている真実性 (Absolute Reality) という語を使用している。これから見れば、Hearn は真如や法性といった仏教用語よりも、神性 (divine) という西洋宗教哲学固有の用語に慣れていると言えよう。

上記の結論を補強するものとして、次の一節を見てみよう。

Buddhism, on the other hand, recognizing no permanency, no finite stabilities, no distinctions of character or class or race, except as passing phenomena. …… For all beings there is but one law, -- immutable and divine: the law by which the lowest must rise to the place of the highest, -- the law by which the worst must become the best, -- the law by which the vilest must become a Buddha.¹⁰

(一方、仏教はいかなる永遠性も認めず、究極の持続性も認めず、性格、階級、人種の違いも認めない。……一切の生き物にとって、ただ一つの法

⁹ Lafcadio Hearn, *Gleanings in Buddha Fields: Studies of Hand and Soul in the Far East*, Boston and New York: Houghton Mifflin and Company, 1897, pp.221-222.

¹⁰ Lafcadio Hearn, *Gleanings in Buddha Fields: Studies of Hand and Soul in the Far East*, Boston and New York: Houghton Mifflin and Company, 1897, p.229.

則、不変で神聖な法則があるのみだ。この法によって、最低の者も必ず最高の段階に高まるはずであり、最悪な者も必ず最高の者になるはずであり、最も卑劣な者も仏陀になるはずなのである。

Hearn は「ただ一つの法則、不変で神聖な法則があるのみだ (there is but one law, -- immutable and divine)」と言って、この法によって成仏できるという意見を示している。仏教学の専門知識を身に付けていれば知っているように思われるが、Hearn がここで言っているこの神性を有する法は、法性または真如であろう。しかし、Hearn は相変わらずこの法性を divine law と英訳している。

こうした神性 (divine) について、Hearn はさらに解釈している。

Modern psychology recognizes no feelings not evolutionally developed through the experiences of the race and the individual; but Buddhism asserts the existence of feelings which are immortal and divine.¹¹

(現代の心理学は人種と個人の経験を通して進化論的に発展しない感情は認めない。しかし、仏教は不滅にして神性のある感情の存在をはっきり認めるのである。)

つまり、Hearn は不滅の神性の存在を認めているのである。

Hearn は divine existence と divine law にとどまらず、Buddha にも言及している。

Such are purely unselfish love, larger than individual being, -- supreme compassion, -- perfect benevolence: they are not of man, but of the Buddha within the man. And as these expand, all the feelings of self begin to thin and weaken.¹²

(これは純粹に無我の愛であり、個々の人より広大なものだ。至高の同情、

¹¹ Lafcadio Hearn, *Gleanings in Buddha Fields: Studies of Hand and Soul in the Far East*, Boston and New York: Houghton Mifflin and Company, 1897, pp.233-234.

¹² Lafcadio Hearn, *Gleanings in Buddha Fields: Studies of Hand and Soul in the Far East*, Boston and New York: Houghton Mifflin and Company, 1897, pp.235-236.

(36) Lafcadio Hearn (小泉八雲)の英文学作品における仏教語について(李)

完全なる博愛である。これらは人間の愛ではなく、人間に内に潜んでいる仏陀の愛である。こうしたものが増大すると共に、すべての利己的な感情は薄く弱くなっていくことになる。)

即ち、Hearnは「人間の体の内にある仏陀 (the Buddha within the man)」と説明している。まだ表れていない、衆生の体に潜んでいる仏は、「仏性」とも言えよう。

なお、神性に関して、Hearnはさらに次のように詳細に論じている。

The reader should remember that the Buddhist hypothesis does not imply either individuality or personality in Nirvana, but simple entity, -- not a spiritual body, in our meaning of the term, but only a divine consciousness. 'Heart', in the sense of divine mind, is a term used in some Japanese texts to describe such entity. In the *Dai-Nichi Kyo So* (Commentary on the *Dai-Nichi Sutra*), for example, is the statement: -- 'When all seeds of Karma-life are entirely burnt out and annihilated, then the *vacuum-pure* Bodhi-heart is reached.'¹³

(読者は次のことを忘れるべきでない。即ち、この仏教の仮説は涅槃における個人や人格を意味せず、単一的な全体性を意味している。我々の用語で言えば、魂をもった体ではなく、神性のある意識にほかならない。こうした神性をもった魂という意味での「心」は、そうした全体性を表す語として日本の諸文献で用いられている。例えば、『大日経疏』(『大日経』に対する注釈書)にこうした言明がある。「すべての業の種が焼き尽くされて消滅し尽くされた時、真空で清らかな菩提心に到達することができる」と。)

Hearnはここで「神性のある意識 (a divine consciousness)」に言及し、これこそ真実性に繋がっていると解釈している。また、こうした見方を補強するために、

¹³ Lafcadio Hearn, *Gleanings in Buddha Fields: Studies of Hand and Soul in the Far East*, Boston and New York: Houghton Mifflin and Company, 1897, pp.257-258.

『大日経疏』を引用して論証している。

然るに、筆者がここで指摘しなければならないのは、Hearn のこうした理解の妥当性である。よく知られているように、仏教の思想には歴史的発展があり、東アジア仏教には漢文仏典ならではの解釈までもある。『大日経疏』は唐代の中国仏教における『大日経』の再解釈であるため、それに見える菩提心思想はインド密教というよりも、中国仏教の如来蔵思想に密接に関係する学説である。¹⁴ Hearn が『大日経疏』に見えるこの菩提心思想をもって仏教の一般的な法性や真如性などを説明しようとしたことには、仏教思想の歴史的発展をやや無視したところがあったと言わざるを得ない。

三、*The Higher Buddhism*

The Higher Buddhism において、Hearn は仏について以下のように説明を加えている。

For Buddhism the sole reality is the Absolute-Buddha as unconditioned and infinite being. There is no other veritable existence, whether of Matter or of Mind; there is no real individuality or personality; the 'I' and the 'Not-I' are essentially nowise different. We are reminded of Mr. Spencer's position, that 'it is one and the same Reality which is manifested to us both subjectively and objectively.'¹⁵

(仏教にとって、その唯一の実は絶対的な仏陀であり、それは無条件で無限な存在である。それ以外には、物質であれ心的な存在であれ、本当の存在はなく、真実の個人も人間もない。「我」も「非我」は根本的にはどのようにも異なっていない。これはスペンサー氏の見解、すなわち、「我々に対して主観的にまた客観的に示されているものは、唯一の實在なのである」を思い出させる。)

¹⁴ 田上太秀『菩提心の研究』(東京書籍、1990年)ほか参照。

¹⁵ Kenneth Rexroth edited, *The Buddhist Writings of Lafcadio Hearn*, London: Wildwood House London, 1981, p.282.

(38) Lafcadio Hearn (小泉八雲) の英文学作品における仏教語について (李)

即ち、仏は完全なる存在であり、変わらない無為法である。こうした仏は自我と非我との対立を超えており、主観と客観との対立をも超えている。

四、*A Question in the Zen Texts*

Hearn は宗派意識に重点を置かないにもかかわらず、全く各宗派の立場を無視して仏教を取り扱ったわけではない。*A Question in the Zen Texts* という作品において、彼は東アジア仏教にとって極めて重要な禅宗を取り上げて、次のように論じている。

It is one of the books especially studied by the Zen sect, or sect of Dhyāna. A peculiarity of some of the Dhyāna texts – this being a good example – is that they are not explanatory. They only suggest. Questions are put; but the students must think out the answers for himself. He must think them out, but not write them.¹⁶

(これは禅定の宗派である禅宗で特に学ばれる書物のうちの一冊である。禅文献の特徴の一つは—これがよい例であるが—その内容が説明的ではないことである。ただ暗示を与えるだけである。質問が示されるが、弟子たちは自分でその答えを考え出さなければならない。彼らは答えを考え出さねばならないが、それらを書きとどめない)

つまり、禅宗においては、質問がなされるが、弟子たちは直接その答えを書きとどめることしないのである。Hearn はこのように簡潔に禅文献の特徴について結論付けた。しかも、少なくとも筆者の限られている知識から見れば、Hearn のこうした見解は正しいと言えよう。修行のきっかけと結果のみが示され、その悟った内容の詳細は明言されない、という禅文献の特徴を鋭く把握できた見解であろう。

¹⁶ Kenneth Rexroth edited, *The Buddhist Writings of Lafcadio Hearn*, London: Wildwood House London, 1981, p.97.

五、*The Literature of the Dead*

「死」に関して、Hearn は *The Literature of the Dead* という作品を残しており、その中にも仏教に関わる内容がある。

まず、次のような注意に値する記述が見られる。

It was here that I first learned, under the patient teaching of an Oriental friend, something about the Buddhist literature of the dead. …… But unless an excellent Chinese scholar as well as a Buddhist philosopher, all book knowledge of the great religion would still leave you helpless in a world of riddles.¹⁷

(これは私が東洋の友人の辛抱強い教示によって、初めて死者に関する仏教文献について何かしら学んだことである。……一方、優れた中国学者であると同時に仏教学者でない限り、仏教に関して本で得た知識がどれだけあっても、それはあなたを謎に満ちた世界に無力のまま置き去りにするだけだろう。)

これは Hearn 独自の立場からの発言であろうが、極めて重要な情報を含んでいる。即ち、中国学者でも仏教学者でもない Hearn は、当時の日本で入手できる漢文仏典の原文と日本語で執筆された仏教学の研究書を読んでも、五里霧中だったのである。このため、仏教の説く「死」についても同じであるが、Hearn は諸文献を理解できず、日本の友人の辛抱強い手伝いを通して仏教文献とその思想を苦勞して少しずつ学んでいったのである。

ただし、東洋の友人の教示だけでなく、Hearn にとって当時すでに刊行された英文の研究書と仏典の英訳も重要な手助けとなった。

Gokuraku is the common word in Japan for the Buddhist heaven. The above inscription, translated for me from a sotoba of the Jodo sect, is an abbreviated form

¹⁷ Kenneth Rexroth edited, *The Buddhist Writings of Lafcadio Hearn*, London: Wildwood House London, 1981, pp.106-107.

(40) Lafcadio Hearn (小泉八雲) の英文学作品における仏教語について (李)

of a verse in the Smaller Sukhāvātī-Vyūha (see *Buddhist Mahāyāna Texts: Sacred Books of the East*), which Max Muller has thus rendered in full: 'In that world Sukhāvātī, O Sāriputra, there is neither bodily nor mental pain for living beings. The sources of happiness are innumerable there.'¹⁸

(日本において、「極楽」というのは仏教の天国を意味する普通の言葉である。上記の訳文は浄土宗の卒塔婆に書かれたものから私のために翻訳されたものであり、その内容は Sukhāvātī-Vyūha (大乘仏典 *Buddhist Mahāyāna Texts: 東方聖書 Sacred Books of the East*) の一部である。マックス・ミュラー氏はすでに次のように完訳した。即ち、「ああ舍利弗よ、あの極楽の世界には、肉体的苦痛も精神的苦痛もない。幸せをもたらすものは、そこには数えきれないほど多くある」と)

Hearn はここでマックス・ミュラーの編纂した『東方聖書 (*Sacred Books of the East*)』に言及し、その内容を引用している。漢文の原典や日本語の研究書とともに、Hearn は『東方聖書』のような英訳を更に活用していたことが窺えよう。なお、唯一の真実性について、Hearn は下記のように述べている。

Sharing the nature of the unchangeable, we share the Eternal Reality. In the highest sense, man also is divine. …… Literally, 'shall become Buddha'; that is, they shall enter into Buddhahood or Nirvana. All that we term matter will be transmuted therefore into Mind – Mind with the attributes of Infinite Sentience, Infinite Vision, and Infinite Knowledge. As phenomenon, matter is unreal; but transcendently it belongs by its ultimate nature to the Sole Reality.¹⁹

(我々はこの変わらない唯一の永遠なる実在を共有している。最高の意味でいえば、人間も神性を持っている。……言わば「仏陀になる」のである。

¹⁸ Kenneth Rexroth edited, *The Buddhist Writings of Lafcadio Hearn*, London: Wildwood House London, 1981, p.119.

¹⁹ Kenneth Rexroth edited, *The Buddhist Writings of Lafcadio Hearn*, London: Wildwood House London, 1981, pp.121-123.

つまり、仏の境地すなわち涅槃に入ることができるのである。我々が物質と名付けたすべてのものは我々の心識に変わっており、この心識には無数の感覚、無数の視野、無数の知識がある。現象としては、物質は究極の存在ではないが、超越的にはその究極の本性によって、唯一の真実に属している。)

Hearn は明確に衆生が唯一の永遠なる実在 (Eternal Reality) を共有するため、同じく神性 (divine) を有すると言っている。こうした解釈は正に法性や真如に対応するものであろう。

六、*Japanese Buddhist Proverbs*

Hearn が日本の友人の協力を得て仏教関連の日本のことわざを選び、英訳と解釈を施したのは、*Japanese Buddhist Proverbs* という著作である。その中に於いて、多くの日本のことわざが英訳されたため、仏教に関するものも少なくない。²⁰ こうした *Japanese Buddhist Proverbs* には、次の一節がある。

Bussho en yori okoru.

Out of karma relation even the divine itself grows. …… Every good thought and act contributes to the evolution of the Buddha-nature within each of us.²¹

(仏性、縁より起こる。

業の関係さえも超えて神性な存在は自然に成長する。すべての良い思いと行動は、我々一人一人の内にある仏性の展開に役立つ。)

²⁰ *Japanese Buddhist Proverbs* における仏教絡みのことわざに関しては、石井公成「仏法僧を尊ばないことわざ」(『文学』第12巻第6号、岩波書店、2011年、105頁) ほか参照。

²¹ Kenneth Rexroth edited, *The Buddhist Writings of Lafcadio Hearn*, London: Wildwood House London, 1981, pp.168-169.

(42) Lafcadio Hearn (小泉八雲) の英文学作品における仏教語について (李)

この部分を見れば、Hearn が「仏性 (Buddha-nature)」という仏教語を知っており、彼が神性 (divine) と仏性 (Buddha-nature) とを併用し、両者を同一視していたことがわかる。今日の西洋の仏教学の研究書と論文においては、仏性について devine の語を用いるケースはほとんど見当たらないように思われるが、Hearn の時代にはこうした理解がまだあったようである。

七、*Otokichi's Daruma*

Otokichi's Daruma において、Hearn は次のように述べている。

Bodhidharma, or Bodhitara, was the twenty eight patriarch of Buddhism, by succession from the great Kasyapa. He went to China as a Buddhist missionary in the first year of the Ryo dynasty [520 A. D.]; and in China he founded the great Zen sect – whose doctrine is called ‘The Doctrine of Thought transmitted by Thought’. That is to say, transmitted without words, either written or spoken. Says Professor Bunyiu Nanjio, in his ‘History of the Twelve Buddhist Sects’: ‘Besides all the doctrines of the Mahāyāna and Hīnayāna, there is one distinct line of transmission of a secret doctrine, which is not subject to any utterance at all. According to this doctrine, one is to see the so-called key to the thought of Buddha, or the nature of Buddha, directly by his own thought.’²²

(菩提達磨あるいは菩提多羅は大迦葉以来の継承によって、仏教の二十八代目の祖師と見なされた。彼は仏教の伝道者として梁の最初の年(520年)に中国に行って、禪宗を創立し、その教義は、「以心伝心」と呼ばれた。即ち、語られたものにせよ書かれたものにせよ、言葉によらずに伝わったということである。たとえば、南条文雄教授は彼の著作である *History of the Twelve Buddhist Sects* 『仏教十二宗の歴史』において、「すべての大乘仏教と小乗仏教の教義以外に、いかなる発言にもよらない、秘密の教義を伝

²² Kenneth Rexroth edited, *The Buddhist Writings of Lafcadio Hearn*, London: Wildwood House London, 1981, pp.225-226.

承する一つの明確な系譜がある。この教義によれば、人々は自分の思いによって直接、いわゆる仏陀の思いの鍵、つまり仏性への鍵を見ることになる。))

上から明らかなように、Hearn は禅宗について論じるにあたって、当時の日本語による著作の代わりに、南条文雄の英文著作を利用している。この点から見れば、南条文雄などの英語で仏教書を執筆した東洋の仏教学研究たちは、西洋に仏教を紹介した先駆者であり、近代に早く来日して日本文化を英語で西洋に紹介した Hearn もその影響を受けた一人であったことになる。

おわりに

Hearn の文学作品には、仏教に関するところが少なくない。仏教語と仏教思想を主題として執筆された著作もある。研究者でない Hearn が仏教を研究した目的は、日本文化と日本社会をより深く理解しようとしたためだった。

Hearn は日本仏教とインド・中国仏教との比較や相違点などにほとんど気づいておらず、日本仏教の枠組みの中においても、各宗派の特徴などにも詳細に検討していない。彼は仏教を日本文化の一環として観察しているである。

Hearn の解釈によれば、魂は究極の存在ではなく、究極の存在は完全なる実在 (Absolute Reality) である。彼は真如や法性などの仏教語の英訳を用いず、divine や Absolute Reality を用いている。Hearn は「仏性 (Buddha-nature)」という仏教語は知っていたが、神性 (divine) と仏性 (Buddha-nature) とを併用し、両者を同一視していた。

なお、漢文学者でも仏教学者でもない Hearn は、日本人の友人の手伝いを通して仏教文献とその思想を勉強しており、当時すでに刊行された英文の研究書と仏典の英訳も仏教理解の重要な手段となっていた。

*本論文は Robert H. N. Ho Family Foundation 基金会の研究助成を受けたものであり、その成果の一部である。